

教育研究グループ支援（研究報告書）

国語教育科学研究会

<研究の概要>

「情報の読解と創造」と研究主題を設定し、情報を正確に理解し目的に応じて構造変換して受容し、発信し、自分の考えをもち、広げたり深めたりする学習を研究した。さらに、主体的・対話的で深い学びの実現を図り、指導と評価の一体化など授業改善を目指し授業改善を目指し、Zoom やメールを活用し、授業実践と研究協議を行い、研究を深めた。

<第1回>これまでの研究を振り返って、成果と今後の具体的視点を明らかにした。

「今年度の研究主題と研究の方向性」（研究推進委員長 前田 修郎）

- (1)「キーワードを見付けるには」①題名と関連のある言葉に着目。②くり返し出てくる言葉に着目。題名に着目し読解することで、見通しが立ち学習課題の分析や解決する時の目安となる。
- (2)まとめの段落を「このように」で書き出す教材が、複数ある。「このように」という言葉が出てきたら、話を括るんだと予想しながら読んだり、自分が情報文を書く時にも活用できたりする。
- (3)すべての情報文には、イラスト、図表、グラフ等がふんだんに取り入れられており、その非連続テキストと文章を対応させて読むこと。
- (4)教科書には、新聞、広告、ポスターなど様々な情報媒体が載っており、これらの情報文を読解したり書いたり（創造）する研究・実践をしたい。
- (5)「構造変換」は低学年からでも可能であるという提案は、とても興味深い。文章をリライトする力は、要約文を書くためにも報告文を書くためにも必須な力となっている。
- (6)「評価・調節」に視点を当てる。『学習と評価の一体化』と『調節』が注目されている。学習結果を評価し、調節し、主体的に学習に取り組み、自ら資質・能力を高められる子供を育てたい。

<第2回>今年度の研究主題と研究の方向性を明らかにし各自の実践に対する課題を整理した。

- (1)どんな人間を育てたいのか。—「情報化時代の国語科教育」中沢政雄—より

- ・送られてくる多数の情報を、批判的に選択・処理できる人
- ・情報を選んで、思考・行動・学習・生活に役立てることのできる人
- ・情報の意図・言語魔術を見抜いて情報公害にあわない人
- ・情報に左右されないで、主体的に思考し、行動し生活できる人
- ・情報処理を通して、社会性を身に付けることのできる人

- (2)情報の創造とは何か。

発信の目的や方法を考え、正しい情報を誠実に発信する。相手や目的に応じて、新聞、パンフレット、リーフレット、ポスターなど、どのツールが効果的か考える。学校図書館、地域の図書館を利用したりメディアの資料も活用したりして、情報を収集する。自分の考えを明らかにし、事実や根拠を基に意見を書く。引用文献や資料など出典を明らかにすることもきちんと指導する。

<第3回>研究をさらに深めるために、基礎的な理論を学習した。

- (1)機能的国語教育とは何か

私たちは言葉の機能に基づいて、国語教育をしている。言葉は①表す②示す③伝えるという三つの働きがある。言葉を表すことで感性を育てる。言葉を示すことで知性を育てる。言葉を伝えることで社会性を育てる。このように言葉の機能に基づいた国語教育をすることが人間形成の機能を育てることになる。

- (2)診断的評価を授業に生かす

診断的評価を行い、どのくらいの能力かを教師が把握して授業に生かすことが大切である。構成の力を見るために診断的評価を行ったが、いろいろなパターンがありすぎてしまい、判断が難しかった。診断的評価を行う際には、どのような項目で行えばよいのかを検討したい。

<第4回>会員各自が、実践授業したい教材をあげて、その教材についての情報交換をした。

「うみのかくれんぼ」については、事後さらにメールで検討していった。

<第5回>全授業者が「単元のシステム」を作成し、全員で検討した。

単元の学習目標、学習内容、教材、学習方法、学習評価が一貫しているか、検討した。

<第6回>事前研究「新聞を読む」(5年)、「ポスターを読む」(3年)を行った。

<「新聞情報」を読む>

③「新聞情報を読む」学習ではどんな能力について学習するのか

情報を読む場合、情報をうのみにするのではなく、情報を批判的に処理することが大事である。それは、「情報を批判的に読む」ことである。「情報を批判的に読む」とは学習指導要の5, 6年のどんな学習内容にあたるのか。[思考力、判断力、表現力等]では、「構造と内容の把握のア」「精査・解釈のウ」「考えの形成のオ」が当たる。

<「ポスターを読もう」>

(3) ポスターで学習する能力

ポスターの機能を考えると、「ポスターを読む」で学習する能力がはっきりする。それは、「言葉や写真、絵などを正確に捉えたり、関連付けたりして、ポスターを読む」である。

ポスターからどんな内容を読み取ってれば正確に読み取っていることになるのか押さえる。「知らせたいこと」「いつ」「どこで」「どんなことをするのか」。情報の出所は「どこか」を読み取る。情報の受け手はこれらの必要な情報が抜けていたら、その情報は正確でない、信頼できないと判断する。ポスターを読む際には情報を正確に読むという視点を具体化する必要がある。

<第7回>実践報告・研究協議「うみのかくれんぼ」(1年)を行った。

「1年「うみのかくれんぼ」の実践から～情報の読解と創造～」(油 史枝)

1年生の説明的な文章として初めて出てくる教材文「くちばし」は、「問いの文」と「答えの文」が簡潔に示されていた。「うみのかくれんぼ」は、2回目の説明的な文章である。文章全体にかかわる「何がどのように隠れているのでしょうか。」という問いに対し、3種類の海の生き物についての「答え」が列挙されている。この文章構成を踏まえ、単元全体の指導を振り返ってみた。

1 直観読みについて

この教材のそれぞれの海の生き物について読み取っていくためには、必ず、「問いの文」を意識させなければならないと感じた。「何がどのようにかくれているのでしょうか。」の問いに対し、「何が」にあたる海の生き物と、その隠れ場所を押さえることで、子供たちは、「どうやって隠れるのかな。」「なんでそんなことができるのだろう。」と、疑問をもつ。直観読みで、生き物の名前と隠れ場所を押さえたことで、子供から新しい疑問が生まれ、分析読みの課題へと繋がった。

今回の授業では、直観読みで、どこまで押さえることが子供の思考に合わせた指導になるのか、とてもよく分かった。子供たちは無理なく、課題意識をもつことができたのである。

2 分析読みについて(本時から)

本時は分析読みの3時間目であった。「はまぐり」「たこ」の隠れ方を学習した後、「もくずしよい」がどのようにして、岩の近くに隠れるのかを読み取る学習であった。3種類の海の生き物についての「答え」がそれぞれ、3文で説明されていて、いずれも同じ文型で書かれている。しかし、「もくずしよい」だけ、どのようにして隠れるのかの文章の最後に、「隠れる」という言葉が入っていないことから、戸惑う子供がいた。「隠れる」の代わりに書いてあった言葉は、「変身する」であった。「変身」は、分かりやすい言葉だと思っていたが、子供によっては、聞きなれない言葉であったようだった。「隠れる」の表現が別の言葉になったことで読みが難しくなった。

教科書には、なぜ隠れることができるのか、体の特徴が先に書かれているのに対し、授業では、どのように隠れるかの後に説明する学習シートを用意したことで、混乱する子がいた。タブレットに色分けをしながら読んでいったが、十分に押さえられていなかったことが反省点である。

評価・調節をしたときに、大事な言葉を取り上げて調節するようにしたが、1年生という発達段階を考えると、条件として出すだけではなく、見本として、課題に対する答えを示せばよいことを教えていただいた。

深化学習として、「何ができるから、どのように隠れることができるのか。」まとめて書く課題を出した。このように子供たちの思考に沿った学習過程を工夫し、いかに思考を働かせて読解させるとよいか、考えなければならない。

<第8回>実践報告-研究協議「ポスターを読もう」(3年)

「ポスター作成なのか、教材作成なのか」(山口 達郎)

1. はじめに

初めて自作教材を準備して、研究授業に臨みました。「身近な題材の方が、児童は関心をもつかな。」「こんなことを読み取らせたいな。」などと、様々に思案していました。しかし、実践してみるとポスターを作成することはできたものの、教材として準備ができたかということ、課題ばかりが残り、学びの多い実践となりました。

2. ポスターを自作するにあたって

自作ポスターの題材に選んだのは、数年ぶりに行われた「前橋まつり」です。祭りは、前橋の市街地中心で、山車や屋台、様々な催しが開催される大規模なイベント。その中には、前橋の小学校40校以上が参加する、マーチングパレードもありました。本校では、6年生が全員参加することもあり、伝統的な行事の一つとなっています。

そこで、自作ポスターAは「桃川小学校に関係する人向け」にしました。伝統を受け継ぐという意味を込めて、キャッチコピーを「心をつなぐ、そして伝える」にしたり、マーチングの写真を載せたりしました。自作ポスターBは「前橋以外から来場する観光客向け」としました。キャッチコピーを「伝統が響く」としたり、写真を載せたりして、祭りの賑わいを表現しました。また、駅を利用する人のことを考えて、駅からの道順を示しました。

3. 学習シートについて

前時までに、ポスターを読み取る際の視点を以下のように確認しました。

- ① 知らせたい内容 ② いつ ③ どこ ④ ポスターの出所
⑤ キャッチコピー ⑥ キャッチコピーと写真を繋げて伝わるメッセージ

学習シートは3種類用意しました。

Aシート：自力で①から⑥の観点について解決し書き表す学習シート

Bシート：ポスターが載せてあり、観点についてそこに書き込む学習シート

Cシート：ポスターが載せてあり、上記の視点が手引きとして書かれている学習シート

4. 本時の授業の実際

ポスターを2枚配った際、児童は直観的に、「2枚のポスターが同じ内容を伝えているがつくりが違う」ということに気付きました。そこで、本時の課題を次のように、設定しました。

「2枚のポスターには、どんな違いがあるのでしょうか。なぜ、違いがあるのでしょうか。」

学習方法は、子供たちと話し合っ、次のようにしました。

- ① 2枚のポスターを見る(読む)
② 2枚のポスターの違いを考える
③ 違いのある理由をまとめる。

自己学習では、読み取りに時間がかかり、15分使いました。

共同学習では、選んだ学習シートに関わらず、グループで行いました。ここでは、2枚のポスターを比べて、書かれている事柄を確かめました。

児童は、ポスターの共通点には気付けるものの、「出所」「キャッチコピー」「伝わるメッセージ」については、悩む児童が多く、なかなか違いに気付くことが難しい様子でした。

そこで、学級全体で、書かれている事柄を確かめ、違いを考えました。その中で児童からは「Aは心をつなぐは、みんなが来てほしいという思い、Bは太鼓の音や人の声が響くということが分かった。」

との考えが出てきました。また、別の児童から

「Bのポスターの地図を見ると、駅からの道順があるから、駅を使う人に向けて載せている。」

との考えが出ました。

これらの考えをもとにして、「ポスターに違いがあるのは、知らせたい内容や相手が違うから」とまとめました。

5. 児童の学習感想

・これから、ポスターを見たら、どういう意味で作られているのか、また、どうして作られてい

るのか調べたいです。

- ・ポスターを読む時には、いつ、どこで、出所、キャッチコピー、伝わるメッセージ、知らせたい内容をきちんと読み取ることに気を付けたいです。
- ・ポスターには色々伝えたいことがあって、大切なことがある。ポスターを描いている人は必ず知らせたい内容があると思いました。キャッチコピーや日にちなどが大切なんだと思いました。

<第9回>実践報告ならびに研究協議「じどう車くらべ」(1年)を行う。

「じどう車くらべ」の授業を終えて(篠崎幸恵)

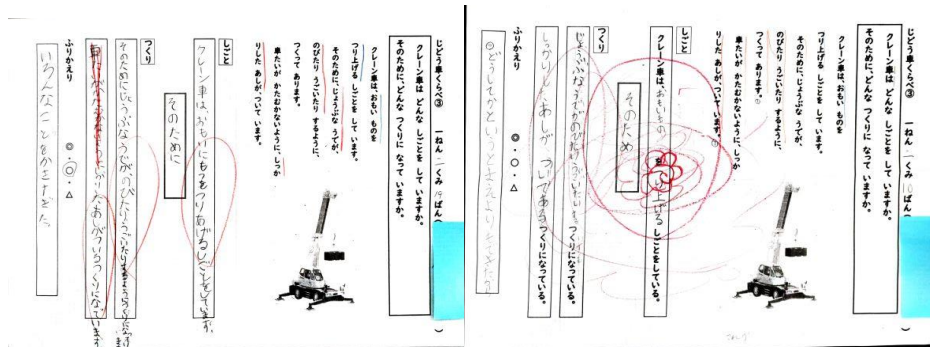
本単元では、以下の3点を意識して授業を進めていきました。

①「問い」と「答え」

1年生がこれまでに学習した説明的文章「くちばし」と「うみのかくれんぼ」は、どちらも「問い」と「答え」の構成になっています。「くちばし」では、それぞれの鳥の説明ごとに「問い」と「答え」が記述されていましたが、「うみのかくれんぼ」では、初めの段落に「問い」の記述があり、その後の段落にそれぞれの生き物の「答え」が書かれていました。「問い」と「答え」に注目した学習を積み重ねることで、「じどう車くらべ」も同じような構成であることに気付くことにつながったと思います。

②診断的評価

教師が考えていたよりも言葉の理解が不確かであったり、正確に読み取れていなかったりする実態を把握することができました。診断的評価を行うことで、学習シートの工夫や動画の活用も効果的に取り入れることができたと感じます。クレーン車やはしご車等、教科書の本文と自動車の動画を何度も見くらべて、言葉とその意味を結び付けていきました。



③共有

昨年度までは、騒がしくなり学習に集中できないのではないかという思いから、ペアで意見を伝え合う活動を中心に行ってきました。今年度の学級の児童は、誰かと伝え合いたいという気持ちが強いので、様々な児童と意見の交流をすることを積極的に行ってきました。教師と児童だけでなく、児童同士でも考えを深められるようにしていきたいです。

<第10回>実践報告ならびに研究協議「新聞を読む」(6年)を行う。

情報化社会を生きる子供たちに(前田修郎)

1.はじめに

私が20代の頃に、見聞きした事件で忘れられない人物が二人いる。一人は、山口県光市母子殺害事件の被害者遺族「本村洋」氏、もう一人は、今回取り上げた松本市有毒ガス事件の被害者「河野義行」氏だ。この二人は、ご自身とは全く関係のないことで、家族が被害にあい、想像を絶するような絶望感、苦しさを味わった。(と思う。)その絶望感、苦しきから、どのように心を整え、日常生活を営むことができたのか、二人の人生観に興味をもち、手記やルポルタージュを読みまくっていた時期があった。

その時に、河野義行氏の「人を恨んだり憎んでばかりしては、自分の限られた人生の中で、いやな感情をもっている時間がそれだけ長くなってしまふ。それは不幸な人生だ。自分は、今を大切に、できるだけ今を楽しく生きるような心持ちでいたい。」(文責 前田)というような言葉に出会った。それ以来、この考え方は私の心に強く刺さり、自分もそうありたいし、子供たちにも伝えたい人生観だと考えていた。

2. 国語科として

上のような考えを授業化するなら、「道徳」でもいいのだけれど、子供たちの心を育てるだけでなく、確かな言葉の力も付け、情報化社会を強くたくましく生き抜いてほしいと願う。

3「情報の読解と創造」の観点から

では、一連の「松本市有毒ガス事件」は、どのような報道がなされていたか、A新聞を丁寧に読むと、伝聞や推量の文が多いことに気付く。

子供たちは、国語科で「事実と意見、感想」を読み分ける学習をしている。6年のこれまでの学習経験で、この新聞記事の問題点に気付くことは十分可能だ。

また、学習指導要領解説において、複数の情報を関連付けて理解することが、課題として挙げられている。

本学級においては、これまでに、同じ情報でも、伝え方によって受け取り方が、まるで違ってくるところを学習してきた。（『言葉と事実』 教出5年上 等）

その単元の発展学習として、同じニュースを違った視点で書いている記事を読み比べたり、事実を伝えるのに、文だけでなく写真やグラフを重ねて活用することで、効果が高まったりすることを学習してきた。

また、情報を発信するときには、正しい情報かどうか十分吟味し、確認した上で、引用・出典を明らかにして、発信する必要があることも学習してきた。（『白神山地からの提言―意見文を書こう』教出5年下 等）。

これまでの学習経験を統合し、本単元で、メディアとどう関わっていけばよいか学べたことは、とてもよかったと思う。そして、「学習のふり返り」の中で、

「今まで、新聞は、事実しか書かないと思っていたけど、新聞記事にも記者の考えや思いが書かれていることがあって、びっくりした。こんなこともあるんだと考えながら、記事やほかのニュースも読みたいと思った。」

などとあり、ますます発展するであろう情報化社会を生きる子供たちに、情報について、これまで以上に深く考えるきっかけを与える学習になったと思う。

<第11回>実践報告・研究協議「海の命」(6年)を行う。

研究授業を振り返って(佐藤 裕子)

本時のことを中心に振り返りたい。

(1)課題について

課題は「①太一の考えはどのように変わったのか。②またなぜそのように変わったのか。」

児童Aの考えを見ると次のように書いている。

①太一の考えは、大魚は海の命であり、その命を取るべきでないというように変わった。②理由は「この大魚は自分に殺されたがっている。」「おとう、ここにおられたのですか」というところから読み取れる。太一は、もりをつき出しても逃げず、攻撃してこない瀬の主に対して戸惑い、結局瀬の主を父と思うことで大魚を殺さなかったのだと思う。それによって、太一は今まで瀬の主は「村一番の漁師である父をも破った化け物」のように捉えていたが、瀬の主は海の命であり、その命を取るべきでないと思えるようになった。

⇒考えの変化を捉えさせるために、3つの表象単位に分けたが、児童Aは3つの変わり方を書いていない。また、瀬の主は海の命であると書かれているが、それがどういうことなのかという自分の考えは書けていない。

児童Bは次のように書いている。

①「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれない」というところから、瀬の主を倒すことが村一番の漁師であると思っていたが、②与吉いさの「千匹に一匹だけをとれば生きていける」という教えや、父の「海のめぐみだからなあ」といっていた言葉を思い出し、悩んだ末に殺さなかったのだと思う。

⇒太一が最初にどう考えていたかが分かる叙述を書いている。また、太一の周りの登場人物のことを関連させて気持ちの変化を捉えることができている。

児童Aと児童Bの考えを見ると、課題に対して正対した形で書かれているのはAの児童である。

①どのように変わったのか。②なぜ変わったのかということについて書いてある。しかし、B児童は「最初は～と思っていたが、～ということを書き出し、殺さなかった。」という書き方である。児童の思考からすると、児童Bのような書き方が考えやすかったように思う。「どのように変わったのか」と、「なぜ変わったのか」を分けられない方が思考しやすかったのではないかと。(〇〇と

いうことから、このような考えに変わったというような書き方)。

つまり、①のどのようにな変わったのかということについては全体学習で押さえる。「太一は瀬の主を殺さないとい人前の漁師にはなれないと思っていた。しかし、殺さなかった。」次に、②なぜ太一は瀬の主を殺さなかったのかということについて自己学習を行う。このような流れにすると、児童は思考しやすかったように思う。

(2)全体学習について

全体学習では、グループで深まらなかつたり読み取りが誤っていたりする考えをみんなで考えるとよかつたと思う。例えば、児童の考えを見ると、なぜ殺さなかつたのかという課題に対して、「瀬の主を殺さなかつたのはクエを海の命だと思ったから。」「おとう、ここにおられましたか。と言っていて、クエをおとうだと思ったから」などというような考えを書いている児童がいた。このような考えを深めるための全体学習を行うとよかつたと思う。

全体学習で行う語句の指導については、こちらから語句を出して指導するのではなく、「不意に夢は実現する」という叙述を基に児童が発言したとしたら、その際に「不意にとはどのようなことですか？」などの発問をするとよい。「クエが穏やかな目をしていたから～」などと児童の発言が出てきたら、「おだやかな目ということからどんなことがわかりますか？」というように、情景を想像して、自分が太一になつたような気分で具体的にイメージを広げさせながら文学作品の世界を楽しませるような指導をしていく必要がある。

物語文を指導するに当たって自分なりの教材解釈がとても大事であることが分かつた。一方で、自分の解釈に縛られずに子供たちの考えを柔軟に受け入れることも大切にして指導していきたい。